

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可  
平成22年2月1日発行（毎月一回一日発行）  
俳句雑誌 沖 第1巻第2号



沖

俳句雑誌[おき]

2月号 林 翔 追悼号

沖 発行所

# 骨正月

能村 研三

「手児奈文学賞」十年

深眠る百名山に洩れし山

先走る数値目標悴める

春を待ち櫂の幹を抱き測る

腕ふれば足すすむなり骨正月

「手児奈文学賞」が創設されて、今年で十年目を迎えた。「市川を詠む」というテーマを掲げ、短歌、俳句、川柳の短詩形三部門の作品を全国から募集するもので、二〇〇〇年という千年紀を契機に始めたもので、私は公務に在る立場から俳句部門の選は渕上千津さんをお願いした。三部門の中でも俳句は最も投句者が多く、その中から百句を選ぶのは大変な仕事でそのご苦労には心より感謝したい。

「沖」の方々も市川周辺のみならず全国から投句をいただき二〇〇〇年の第一回目は当時札幌におられた吉田明さんが大賞に輝き、二回目は長崎の荒井千佐代さん、三回目は遠藤真砂明さん、五回目は千田敬さん、六回目は柴崎英子さん、七回目は佐々木よし子さんがそれぞれ大賞を受賞し、この他にも秀逸、佳作には多くの「沖」人が選ばれている。全国の「沖」人も市川には先師登四郎が長く住んでいたこともあって多くの方が訪れ、その時の印象を俳句に詠まれている。

テーマとなっている「市川」もこの十年で、目まぐるしく変わった。

雪もよひ神事のため荒筵

沖島孝光句集『航海灯』

乗初は海調律の益荒ぶり

渡部節郎句集『転舵の渦』

加賀に強情会津に一徹雪しまく

小嶋洋子句集『泡の音色』

立ちのぼる泡のつぶやき初泉

木村公子句集『花貝母』

海峡を渡る風よみ凧揚がる

大沼遊魚句集『倭彩』

雪五尺より出郷の志

いろいろな意味で、昔より発展したこともあれば、懐かしいものもいくつか失われた。

あらためて十年間の作品の一つ一つを読みかえしてみると、その時代でしか詠めないものもあつたり、あらためて十年の時代の変遷というものを感じたが、今後「市川」の失われていくであろう風景や風物をしっかりと詠み留めて後世に伝えていくことも必要なことであると思う。

十回目の今年からは公務を離れるので淵上千津さんに代わって私が俳句部門の選をやらせていただくことになった。

能村 研三



# 蒼茫集



そのとき

藤原照子

霧込めの紅葉風林火山の地  
いつかはの遂にそのとき胡桃落つ  
見ざる聞かざるまして言はざる竜の玉  
甲斐信濃跨ぐ連峰鷹舞へり  
つかさどる指揮の強弱冬怒濤  
追越さる風の落葉のカーリング

恋唄

田辺博充

もうとべぬ跳箱冬の日に晒す  
北おろし大磨崖仏の吐息かも  
舞上がる雪セリーヌの恋唄に  
藪山に入りて獵夫の眼となれり  
傷つけて傷つきもして寒夕焼  
星冴えて洩民に似しわが故郷

玉子を花と

田所節子

雑炊に玉子を花と解く男  
明日留守の厨を行き来して湯ざめ  
産毛濃く生れて男の子や寒波晴  
余生てふ身軽さにをり草の絮  
霧が霧追榊林先生ひ先生を送る頃  
なつかしき電話に師の訃告ぐ寒さ

蠟涙の嵩

北川英子

臥す人に空だけの窓小鳥来よ  
十夜更けさめざめと蠟涙の嵩  
白鳥来る総身の夕茜いろ  
冬霧の湧きて幽谷めく日暮  
いてふ散るこのときめきの晩節欲し  
冥府「沖」顔ぶれ揃ふ遠枯野

山に雪 大畑善昭

枯蓮の魂晩すでに水の底  
藤の実の弾ける日和つづくなり  
毬栗の殻の火だるま山に雪  
白鳥の雲低ければ低く来る  
鬼胡桃置きゆく肥料袋ごと  
雪明り採血管へ血の走り

針 穴 千田百里

いざ東大へ銀杏を拾ひませう  
山茶花の身を持ち崩す日和かな  
糸通し難き針穴より冬日  
舌の根も木の根も健やかに師走  
夕ならひ手配写真は夏シャツで  
嘶家の座して駕籠舁く師走かな

藍 宮内とし子

いく度も洗ふ冷たさ藍染まる  
太陽が白を引きだす紙干場

しぐれ傘最高地点の駅に降り  
湧水の十度を保ち山眠る  
星屑のひかり集めて霜柱  
蓮枯れて音断つ池となりにけり

絵地図 上谷昌憲

菊坂のつたなき絵地図冬うらら  
もう開かぬ勝閑橋よ開戦日  
羽子板市江戸の名残の見栄を売る  
街師走付録ぶくれの雑誌かな  
年詰まる騙し絵めきて地下の街  
手すさびのダイス転がす聖夜かな

凧一号 遠藤真砂明

凧一号残日を吹き落す  
注連張つて疾風しぶきの磯祠  
少しかなしき鮫鱈の怒り貌  
海鳴りの明日へめつむる冬至風呂  
風道におのれ晒すや冬の鴈  
三七日の師へ冬麗の早瀬波

整 荒井千佐代

花石路の真上に干され修道衣  
長崎や積み上げしごと冬灯  
雪催くづれるほどに角煮煮て  
登いじまかに初雪消ゆる葬かな  
声を殺してすすむ冬川も我も  
枯蓮を見る逢引の行き帰り

シーソー 辻直美

寒波来る温顔の師の訃報もて  
ほのほなき厨火をもて年守る  
切干の音たてさうに乾くなり  
魚偏のあつまる湯呑一の酉  
開戦日ラジオに背丈届かざる  
敗荷の無残やシーソー上るたび

独り焚火 久染康子

翔先生亡し葉巻・ステッキ・冬帽子  
島裏の独り焚火は狼煙めく  
鮫鱈の着流しの皮剥がさるる  
山上湖雪来る前の無表情  
狐火のぽぽと地表を離れけり

セーター編む眼鏡二つを使ひ分け

柚子の相 吉田政江

木枯一号校庭掃除はじめから  
冬虹へ幼な子の手を離しやる  
敗荷やおもひ思ひの疲れやう  
入れ食ひの冬のさよりへ竿撓ふ  
にほどりの隙だらけなる浮かびやう  
風呂用に選り分けられて柚子の相

古 曆 安居正浩

楽しみな一日の残る古曆  
林立の画架それぞれに冬景色  
酒樽を大きく積むも年用意  
冬ざれや朱の落書のアートめく  
寄鍋にしゃうと妻の言ふ日暮  
冬夕焼背に喪ごころの深くなる

魁夷の童画 成宮紀代子

三師碑の追憶つきず冬木の芽  
嚙下やや衰ふ母や室の花  
冬ぬくく魁夷童画の頁繰る  
塩噴きしまま物置に茎の石

小春日の炒り豆本舗鳩寄せて  
マスクしてマスクの人を避けにけり

乱れ咲き

武藤嘉子

宙に道あるやも穂絮真直ぐに  
再診の菊の日和をよしとせり  
ゆるやかに編みて自愛の冬帽子  
喪ごころや黄菊白菊咲き乱れ  
霜踏みしめ今日の己をたしかむる  
鮫鱧鍋齒応へのある一語かな

北志向

秋葉雅治

北塞ぐ諦めきれぬ北の旅  
寒や車中携帯電話黙深め  
七人の敵に遭ひきし炬燵かな  
不似合もよし黒塀に灯の聖樹  
三寒の辞令赴任の四温かな  
煤逃のとどのつまりは入院す

オカリナ

松井志津子

千鳥とぶ智恵子遊びし砂山に

九十九里談

浜寒し鳥の骸の海向いて  
揚舟の捨て舟に似て冬ざるる  
一つ灯に夫の寝落ちて夜の長し  
オカリナの音色と思ふ冬銀河  
年金の話へ北風の割り込みり

日向ぼこ

小山田子鬼

日向ぼここのかぐはしき時止れ  
雪吊の男むすびに羽虫舞ふ  
ポインセチア一夜信徒のごとやさし  
語り種なく晩年やセロリ噛む  
浮寝鳥不眠つづきをかこちつつ  
湯豆腐や自虐の七味振り掛けて

猪追ひ

渡辺輝子

猪追ひの警笛夜の小海線  
银杏落葉あとの虚空の広さかな  
ししやも干す隙を抜け来る風の窪  
電車にも乗る極月の竹箒  
たひらかに冬日天降れる相模灘  
三猿は今年の諫め帝釈天

# 潮鳴集

反射神経

内山花葉

綿虫に反射神経あるやうな  
さざん花や乾く音たて無洗米  
第一陣の頸たくましく白鳥来  
冬麗や吾も北めざす旅を恋ふ  
鷹とめて最も天に近き巖

スターリン

藤原はる美

底冷の書庫に居座るスターリン  
虚と実を詰めて寒夜の国際線  
魚河岸に包丁買ふも年用意  
噛み合はぬ話冷たき手をこすり  
月冴ゆる岳は刃を天に向け

やさしき顔

古屋元

珈琲はキリマンジャロや冬籠  
噫して守衛やさしき顔となる  
神の留守戸棚の隅に砂時計  
惜別の駅手から手へラ・フランス  
街遁れ来し寒月の終電車

霜しんしん

細川洋子

大根の白妙たぐるかつらむき  
歯の浮ける会話絨緞深々と  
病気診て病者みてゐず花八手  
間奏に口笛の曲霜しんしん

林翔先生を悼む

寒晴や名残のいろいろの唐辛子



# 沖作品



## 能村研三選

島国の中に島々鳥渡る

東京 能美昌二郎

届けられ林檎の香り吹き出づる  
引力に耐へて熟柿の二つ三つ  
紅葉山蹴つて飛び立つパラグライダー  
青き灯を秋の灯として非常口  
張り終へて山の風見る雪吊師  
霜残る夕べ山裳深くせり  
その裏に日射し赤らむ柿すだれ  
山を見る牛たつぷりと冬日浴び  
冬富士の柔らかき日の竹とんぼ  
星月夜水面ゆらして水を汲む  
夜長ごとスイング「A列車で行こう」  
団栗や金時山の武者震ひ  
秋天へ立てて蕁束揃へけり  
秋日燦長屋門よりオートバイ

市川市

和田 満水

千葉

鶴見 遊太

つり銭の旅より雫新豆腐  
寒波来るか階なす雲の遠山に  
灯の冴えて子規の絶筆諳ずる  
敵陣へ姫置き去りに菊師かな  
書を膝に夢現かな雪の声  
冬天の声きく電波望遠鏡  
眼前の百八十度山眠る  
絵手紙に小春の空の色があり  
眠りをる細胞さます寒の水  
パリ時間持ち来しままの日向ぼご  
うつた姫の案内のままに小海線  
潭身の彩を残して山眠る  
時雨やみ甲斐の山々第二幕  
落葉松も八ヶ岳も研がるる北下し  
落葉松林あまねく冬陽山肌に

市川市

佐々木 群

千葉

清水佑実子

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

島国の中に島々鳥渡る 能美昌二郎

私たちが住む「日本」自体が太平洋の端に浮かぶ島国であるが、この日本には実は有人島だけでも四三〇以上、無人島を加えると数え切れない数の島があるとも言われている。そのひとつひとつの島には、その島ごとに独特の景色や生活があり、自然・風土があり、文化・風習もある。能美さんは面白い視点でこの句を詠まれている。「島国」「島々」とリフレインの用法を使い、「島」と「鳥」は字こそ違っても、似た字で、俳句の表記の上でも面白い効果をあげている。瀬戸内海などは、小さな島々が点在しているが、その島々からもっと高度を上げて鳥瞰図のように眺めてみると日本列島の形がおのずと見えてくるのかも知れない。

張り終へて山の風見る雪吊師 和田 満水

雪吊といえは兼六園の庭のそれを思い出す。雪吊りは職人の技で、手綱の縄を一本一本結び、又は編み、樹木を雪から守っている。その縄と縄との間、竹が描くライン、その姿は芸術的である。中心に立て

た芯柱の上から百本を越える縄を投げ広げて枝を吊っています。松の木は常緑の葉で雪の重みがひときわ加わることから、最も念入りな作業となる。ベテランの雪吊師でも緊張の一瞬で、一本目の縄を張り終えると山の風の動きを見る余裕が生まれる。

秋日燦長屋門よりオートバイ 鶴見 遊太

長屋門は大名の武家屋敷門として江戸時代に多く建てられた。諸大名は自分の屋敷の周囲に家臣などの長屋を建てて住まわせた。その一部に門を開いて一棟とした物が長屋門の始まり。その後苗字帯刀を許された富裕な農家や庄屋でも長屋門が作られた。門の両側部分は使用人の住居・納屋・作業所などに使われていた。市川でも北部の方には、こうした長屋門のある農家も軒か見られる。納屋として使われていた所からオートバイが出てくるなど、意外性が面白い。

寒波来るか階なす雲の遠山に 峰 幸子

冬の気圧配置となつて、風が強い日に現れる雲は、日々刻々いろいろな表情をみせ、時には強烈に毛羽立って見えることもある。この表情を作者は「階なす雲」と表現した。寒波が来る気配を感じさせる時で見ると寒々しく見える。作者は松戸にお住いの方なので、いつもは太平洋側の気候で雪も降らない状況であるが遙か彼方の山々の向こうには雪を降らせる雪雲を湛えている。

パリ時間持ち来しままの日向ぼこ 佐々木 群

日本ではほとんどの交通機関がほぼ時刻表通りに動くが、外国へ行くとき、そういう訳にはいかない。特にパリの地下鉄などは時刻表自体がなく、荷物も配達予定時間通りにはまず届かない。役所などにも必要な書類を申請しても、発行まで何カ月も待たされる。日本人のような几帳面な性格とは違って余裕を持って暮さないと、イライラする一方である。作者はかつてパリに暮したこともあるのだろうか。パリでは常に余裕を持って行動していたので、ゆったりとした気持ちで生活を楽しめたことを思い出し、そんな気分で行向ぼこをしてみた。(以下略)